



寒燈
夜話
小栗外傳
三編
六

~13
3919
18



門へ13
號 3919
卷 18

寒燈夜話 小栗外傳附録

東都 絳山 述

小栗が事人口小臆多と云ふも終としてささるるなり或説云小栗
 判官兼氏遠州の人なり蒲野冠者範頼の旗下さり相州のあけはれ
 横山といの者の女見照る姫といふ通じられ横山これを悪く兼氏を招けり
 鬼麻毛と名つけられ悪馬に乗め食殺さるるけり兼氏を殺す
 御者あてりの教ともせむと云ふ横山はく憤り毒酒を進め兼氏を殺し
 後小兼氏獲生して後次の上人よきられ能野本宮の湯よりく本復し
 相州にまゝと照る姫を還會横山を討て本領を安堵と爾より遠州天竺川に
 小栗の氏を名をすの君あり是安誕の海況なり又小栗實記と云
 浪華人畠山泰山と云者編 世は行くと信に鎌倉大卿紙澤倉安成九代記



浪華人畠山泰山と云者編

世は行くと信に鎌倉大卿紙澤倉安成九代記

南朝記に小栗がくちを戴り渾少と差あり何う是ると知るに常陸國誌に
小栗が系圖あり此ホの書を左母出せり。

○鎌倉大草紙巻之上応永元年癸卯春の比より常陸國の住人小栗
孫五郎平満重とありのありて謀反を起し鎌倉の山下知を脊り同持氏公
に退治して以動座ならせ結城の城をくみ出同八月二日より小栗の母を責
らる。小栗義とくより軍兵數多城より外へ中防戦られども鎌倉勢ハ一色
左近右監木戸内道介と先母の大ねとて吉見伊藤を上校四郎ホの荒る
かりて両方より責入るは後と母を責落され小栗も行方ありは行方
守松宮大馬氏持綱も小栗も同意とてち行方と谷谷渡河を遣り討た
けは榊井下野守佐々木近江入道も是亦一味の由也同八月八日討取れ八月
十六日結城より武州府中へ入陣ある。中畧 今度小栗忍びて三州へ行より

其子小次郎入ひとる母忍びて関東ありは相州権現堂とあり更り
これ其多の強盗とも集りたは所は宿を借る主のトと此主人と
常州有徳仁の福老のトと父定めて隨身の宝あるト打殺して取入る
終合と去好から徳ある家人ともあり何せんといふ一人の盗賊と酒毒入
吞せ殺せといふかと同じ宿くの控女とも集め今校すと親せと戦は彼
小栗と馳走の都みのて酒をともなは其夜敵多しを殺して母と云ふ
遊女此る小栗よあひさし此有る事とて知るやみはうも此酒を吞
らる有るは小栗とあつれ此よりとさやれ多間小栗吞やういりては酒を
さう小吞さうたて家人共は是と考へ何れも酔伏てたり小栗は侵さる
物もあつて林の有るへ出れ林の内は鹿毛なる馬を獲てて並り
此馬の盗人も海道中へ出大名往來の馬を盗するも此一のあり馬

まく人をも馬喰階をれハ盗人ども下付し林の内はけり置たり小栗尾を
 見てゆきまふり賊室少く取付く彼馬車兼轂ををり落行を小栗と
 互の馬を中を片時の万ふ後沢の道場馳行上人と頼こられ上人憐み
 時衆二人舟三羽へ送られ彼毒酒を呑み侍人并仕女が酔伏するを
 河水へ流し沈め材室を尋ねり小栗を尋ねりひきどりたり盗人ども
 夜分散を散らししれ仕女酔する所ありては伏されども原酒飲
 呑まりけり水は流れ行川下り遠のり助り多し其後永享のころ小栗
 三羽より舟を彼遊女をよび給中侍のたよりをよへ盗人どもを尋ねり
 みみ誅伐し其後代々三羽居候とす。

鎌倉管領九代記巻之四巻永九四年五月廿四日よりの記を。

同元年五月廿八日小栗孫次郎満重退治のころ左馬頭村氏三千五百余騎

と奪し下総國結城小倉向し去る八月小栗満重所領のころ小
 分て左の殿後ふらみを合はみ家入若輩を引つけ下総小倉より結城の
 城を築き兵糧を要害を堅くし軍勢をまひらけり近郷を小栗の
 兵松治部を捕が残輩その外上総下野の一揆系をけり小栗の
 五六百人及び村氏之れ小栗の多し安領憲実の合軍の上校と郎方より一
 千余騎を引けり向られり寄りて城ちりけり陣を取る起て城の兵
 進ちりてとらりて三百余人木戸をひりて打て出りたるを島津大助が
 軍勢二百五十騎馳合てたらしむ城兵散り掛され後なる城へしき
 りりぞく寄りしよ勝りておしけりて城かけ入ると城中に残る
 兵ども同時打て出て矢種をよまは散り射る者百餘人といふは負
 石も打れてをみりしり荒手を入り責かき皆城中へ入りしり

寄手悉く逆茂木の落手にて結ひ掛籠り居り城兵は追籠らるる
 首を出さざれば要害きびし城がれぬ寄手打入れば城もたぐはく隔て
 掛籠り境の矢軍にて日を送る城中これゆきまを屈して穴を龍りしれ龍れ
 ことこの内の多し似たり。木戸を堅める旧井五郎しひくあひあしり
 寄手の結うけて物喧し夜打りし時ほきせんと志同し草
 をしごひ廿七人ある夜西風をげり城中より忍び出く香河修平亮の
 陣をよ火をさし圍はけりしうさそや城中より打て出らんとて寄手發死
 立上り下り返り馬と物の具よとひりりる火の子散る陣をくち
 つれとびき風を吹きたれ煙もむせび火も惑ひ打消さんと防人も
 後敵の多少をえり味方の軍兵をも弁入とあつる敵と一士
 討をぞいじは旧井五郎もさそり小勢へさのめゆ你个て跡をえ切らる

とて陣を小積置くる兵糧少くなく。まがふ城へ入りよる寄手はこま
 懲り責りよるる陣をまきびくかまへ用をそいしける刃も後と割
 鬼もぞと株をちるうさそと笑るぬ人かたりけり左の辰村氏もひか
 るる千徳も足る寄手合武者のあり居る小城を責めざる手月を
 不承をさそり勢をた備射給はるる七義成内へ小栗も同き一桃井
 下野入道佐々木も入道も一味と刀とてやもこれらり後結死し
 ちしたるたれ持氏もやを向ひ一魁も責りせんとて強食を打結
 の城ははくともむしく同射は圍をゆるしつてせあ上り城を
 陣兵天種を惜まこと散る小射出。大木五六十を切く落し
 完戸又四郎も五百余騎痛手有りて引あしり城中二百餘人木戸を圍
 突て出つて四角分れ追まくりしる村もあつて大将左馬助の旗を

なぐれろは荒年八百余結陣と入勢二百餘人中母つみは討ち入り戦
城兵徒とくつみ討ちて東にまゝに居りて寄りあられし目も越さず木戸
引かざり逆茂木をうち倒して込けし城兵をせむるもくし入られ押統て
責入小倉平火をかけし城兵火はほとひ防ぐれやうもなく我先中へ落失
それへ大將小栗孫次郎と家の子竹之盛と子息小次郎を討ちて陣を成し
つづきの腹うけ切く煙の中を臥せり。下畧

○南朝記 前二書と大同小異るまゝ要を摘み出さ

應永二十九年常陸國人小栗孫五郎平満重打氏の命をとりしは故
持氏上校三郎と方小山左馬介と命を討ちあはし十月廿二日小栗を城あき
と合戦と同年五月廿八日徳倉の持氏小栗退治とく下総国結陣の
陣といふ。同年八月二日小栗落陣して満重及び子孫を討ちて

落ゆきしを塩谷後河原邊にけりち取るとあり。

○鎌倉志より大草紙を引く小栗がとを云へり世人の知る如く。

相州後伏見の遊行寺の院中長生院といふ小栗并家人の墓あり。その院
より小栗畧縁記を引く前書と異なるく雖墳墓より書を縁記に引く敢て杜撰
中もあはれは左に如く参考の一助とて因に遊行寺の圖説をも引く。

藤澤山無量光院清淨光寺 時宗本山

本尊阿弥陀佛 座像長四尺慈覺大師の作 服禮祖一遍上人身四代目

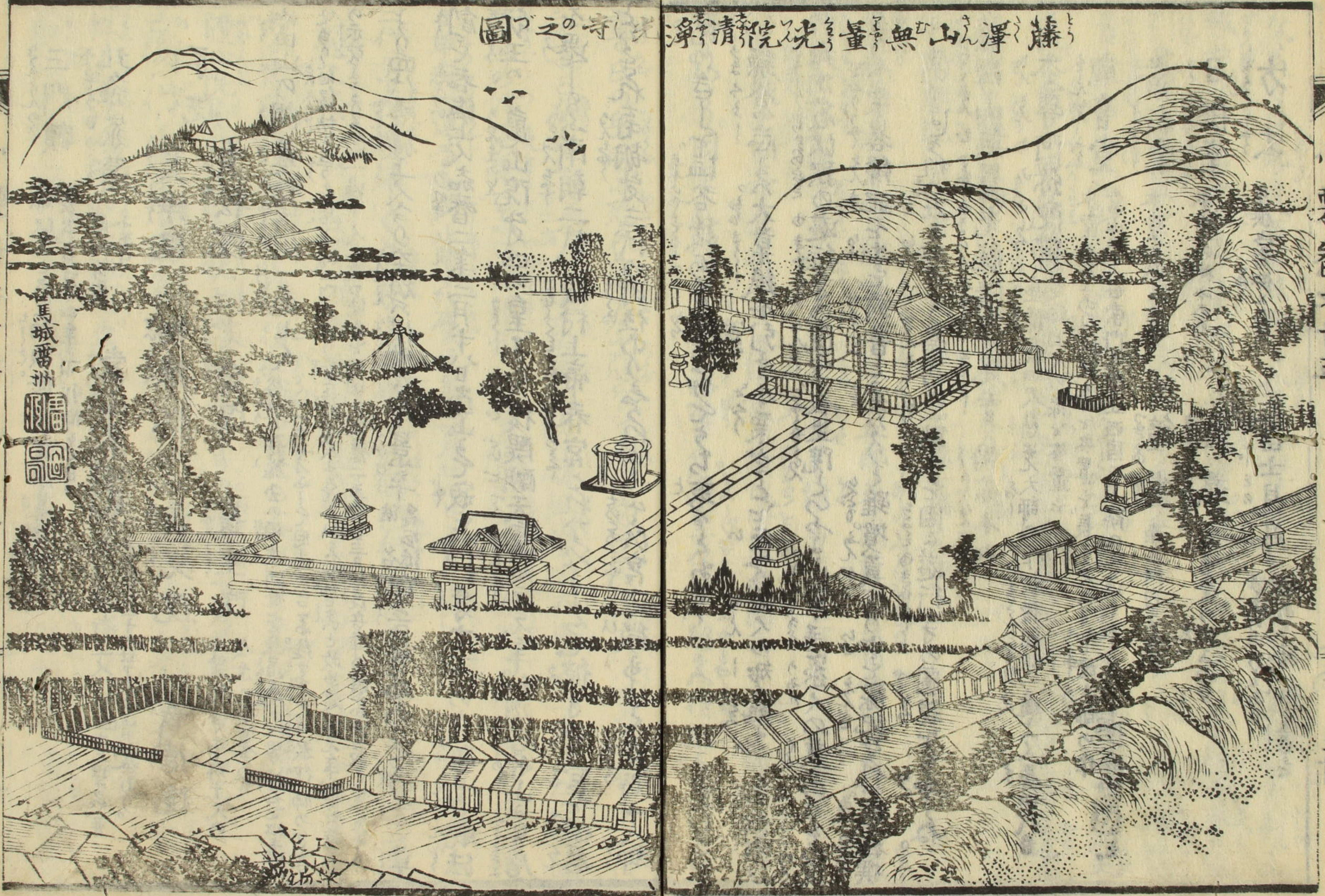
観音堂 本堂の左あり。正観音と安置と。長を尺五寸智證大師の作
當山四十二世南門大僧正西国三十三所の土を以て本堂に下し埋て巡礼代を

常行堂 本堂の側あり
鐘堂 南の門内あり

日供堂 本堂の側あり
經藏 観音堂の側あり

方丈 日供堂の側あり
富士見亭 方丈の上方あり
額あり清言と書を

藤澤山無量光院淨光寺之圖



馬城雷洲
印

小栗

三門額 藤沢山とよと勅額從二位藤原基時卿等

北条家墓 南門の内 當山累世墓 同基行上人より五十三世まで并
藤沢山三十三世までの墳墓あり。

子院 眞淨院 栖徳院 眞光院 善徳院
負松院 光岳院 長生院 小栗照手より十人の
及赤の墳墓あり

當山の開基の宗祖一遍上人 俗姓伊豫の須主河津七郎道慶の二男。幼名松重。寛
和より隨縁坊と号す。后上御土門ゆかり。聖徳上人より名を智光と改め。建治元年。慈母持現
の示寂より名を一遍上人と改め。徳永と回国。正應二年八月三日。持及兵庫の御おと夜を年五十八
より四代香海上人より奉終。侯母五年景平。法名法起。立の資助のりて高寺と草

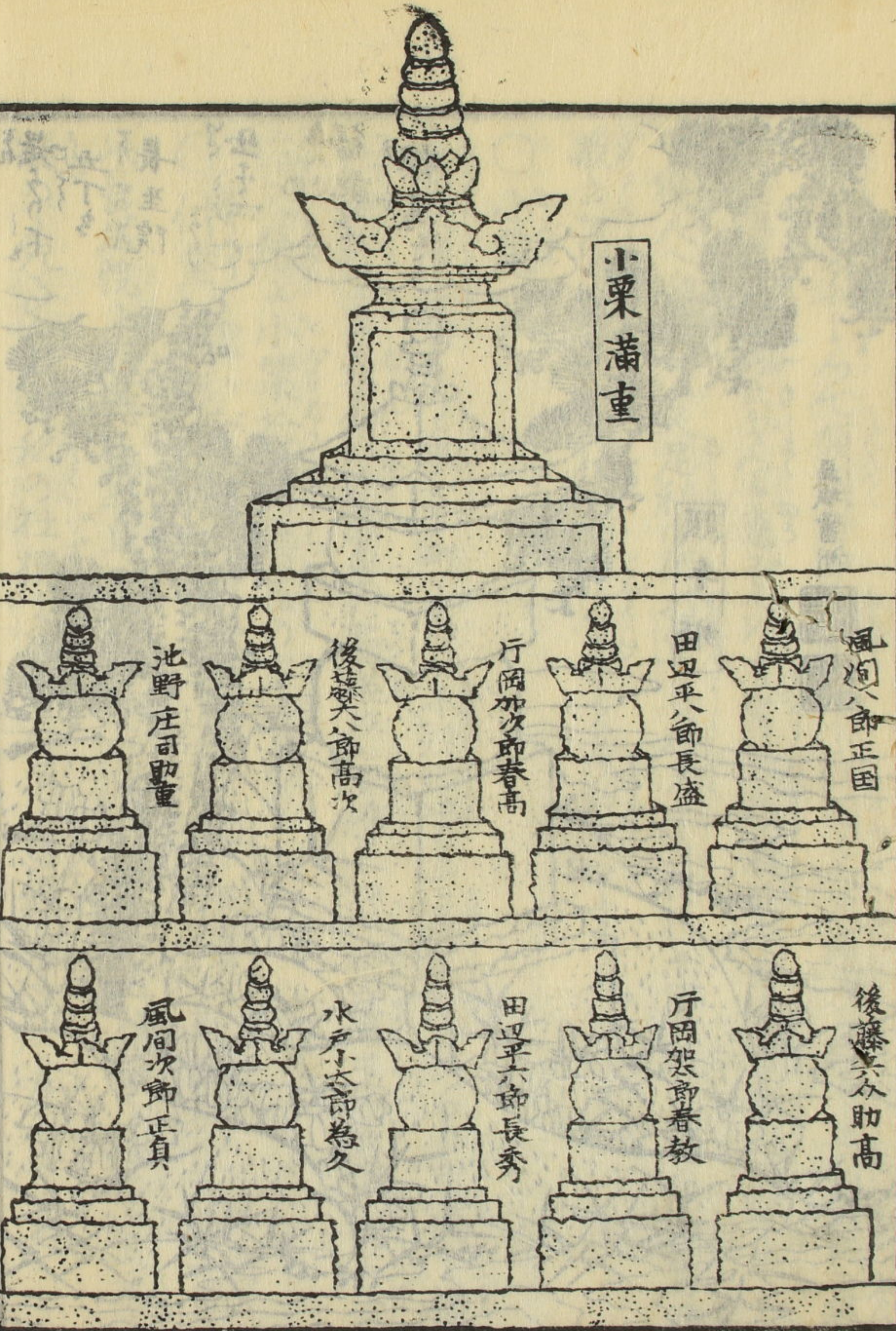
創と香海上人嘉暦二年二月十八日。尚山之寂を 年六十三才十二代の寺職を親法
紀王の 龜山院才四の皇子之 後醍醐天皇延元元年和別吉母山より居
を遷す。南朝二代 後村上帝春宮とこれか。よる。彼才四の宮を徳君
とたされ。南朝才三代の即位のり。あれども。生宮方微も。吉野十八御

尊氏氏の兵威お恐れ。宮方小随のり。と。遂に才四は。行八世の渡船上人の。心
才子と成り。 此付元年 延文五年より藤沢山は御在應安二年小栗津國
兵庫の津さ光る。お住職。永和三年小栗川山形光明さ小止湯。至徳二年
甲府一蓮さ。御止職。嘉慶元年二月廿六日。海内行。一。あ。時宗十
二代目と相續は。と。親上人と。號と。徳國修行のり。十四年。なり。應永三年
の秋上洛ま。し。百一代の帝。後小松院の朝。小内。の。王座の。左。着。や
ある。南朝の。畜流。な。れ。後醍醐天皇の宸影。并。御宸箱。礎。礎。小。此。宮
隨心院より。行。行。親王。お。授。ふ。し。多。此。縁。由。あ。り。て。行。十三。世。上。人。よ。り。て
己後。代。倫。吉。頂。戴。悉。内。の。格式。小。御。所。埋。圖。の。内。之。事。目。よ。り。 龍。顔。を
拜。し。ま。り。 親。法。親。王。泰。永。四。年。の。美。回。國。修。行。の。り。 後。小。松。院。を。達。
歡。聞。三。利。三。代。の。軍。長。滿。之。 勅。命。あ。り。て。當。代。行。上。人。の。南。朝。即。位。の

龍顔を

歡聞三利三代の軍長滿之 勅命ありて當代行上人の南朝即位の

小栗満重



桓仁王百一代小松院の御宇奥の常陸國小栗城に宇孫五郎判官
 満重性ハ桓武天皇の後胤にして武臣屬一智勇兼依の士なり。應永
 の初同土流言に依て謀叛の父ハ源家より遠官領持氏朝に征討して一色
 左近右衛門末内近公駈向らせ。数月戦かるとも満重を堅固よして一族亦
 勇と揮ふ。あ容易に落されが加勢して吉見仲稜も上牧四郎亦近加のなる
 いも労働とといふとも折下は海軍及びね満重を練十一諸密に城内を忍び出
 三河國に流行ぐる折しも相州の士横山大膳の志す。馬場存三太といふ者
 神詣の海を満重と同休し。横山の鼓を誘引を然る。大膳といふの強要よ
 きて。流人を掠り山城を棄てし。榮曜は漆り多。女を集め。中一照姫と
 ける。妓女あり。俗に照姫と云ふ。父の北面の浪士や。一子多るを欲し。親考へ祈せし
 設し。子之父母亡て。後故ありて。横山に住居たり。が満重返笛のら。相情ふ

よんで階老の托を結びしを。却て月日も立ぬ月日。大抵の何と比して判官の
幕下に附んと文武の人を撰び侍り謀るといふも。満守は智やして保るる
よるがり。其比大膳一疋の悪馬在り。大いふ人を喰ふ由鬼麻毛と名
づけて後園の樹下に寝る。満重勇猛にして従つたれを勝て彼馬の
害をせん。満重は謂く曰仁社此馬と云はば。則つて。と有り。小栗
重馬の上の達人なり。故て奉よせのふと打まごり。堅横序破急甚盤の上
ま心自在なる其術を人々奉る感公せり。横山の繁相違。家守も亦合
美女妓女を海中。糸竹歌舞の奥を演ぜ酒宴おとせ。世に毒を以て害せんと
横山は従違て追め吞せられ。各程行く五辨痛傷して忽ち氣を失て仰ぐ。以
て。あまふ人々悉く醉死せり。横山は徒太は飲毒。怒ふ故。毒を呑み死を
上野が示す捨り。下時夜上人其秋の夜。青衣の官人ありて曰我の

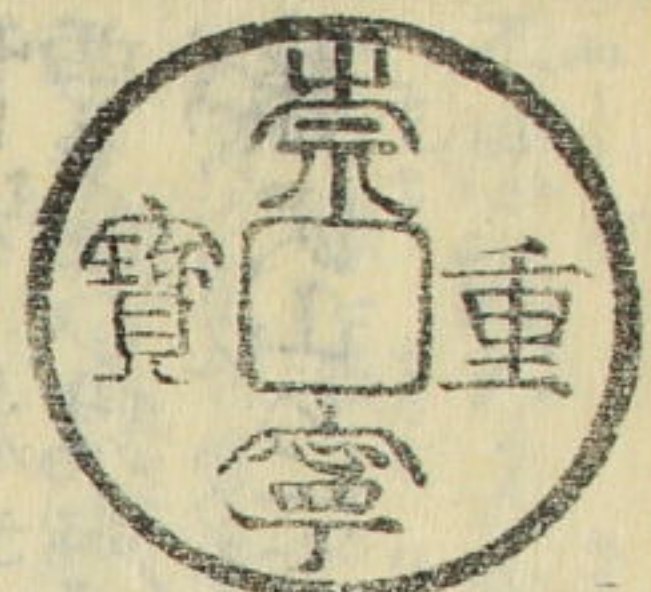
正字

閻王の使くと一ツの虫を上人へ呈し其書と披さる。大日本常陸國小栗満重
士拾人とも鳩毒の毒を害せられ。士拾人の宿世の罪因。満重獨り報業するに依て
獲生せしむ。能野の温泉に浴せ。速く平復せ。と。の題なり。爰は壽考の
といはば。父子等彼所へ。子と云は。飢天吠嗥。群鳥死を啄中。満重獨り氣
通せと云へ。不射言耳。父へ。拾人の屍を葬り。満重を杖打して。車を造り。車
御札を付其文。曰此病人。送能野本宮湯。若有人暫助引之者。可勝供養。於
僧功德矣。夫より地名と車田。路と云。此車。終舟本宮湯の宮あり。入湯
の間。髪を洗ひ。て結び。多し。本復ありて。世と車隊の下へ。捨られ。これ
より。箱を。て。小栗判官不時。の箱といふ。あり。爰は。照姫。之。常と。親。世と。道。人。と
穴。頼。は。淫。家。を。逃。去。り。武。州。令。次。六。浦。小。赴。し。追。手。の。者。あり。を。逃。し。て。後。悔。み
呵。嘖。し。衣。類。を。剥。ぎ。り。て。侍。女。が。淵。に。投。入。れ。て。去。り。ぬ。娘。頼。り。の。小。歌。音。を。念。と。り。て。

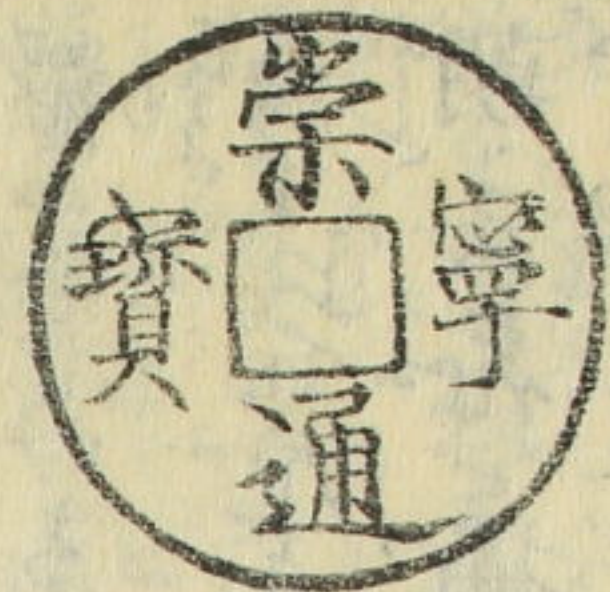
不思儀なる我六浦川村千光寺の観音光りと現に姫が瀕死を救ひしを以て
 此の像と照子の姫との存する。其比世に於ては一人の漢文あり此奇蹟を以て感歎し姫と
 又若かりの存するともいふ。宅小鏡ひびひひ小妻嫉妬しく姫の美女なるを妬み松枝を集め殺さんと
 欲を姫一ひひ観音と念せしむるに風紀を煙撲きぬふ嵐にて姫を身と除くこれ
 傷に大士の靈驗と云り思ひし妻怒り所を松枝を江中へ投ぐるふ同境津戸の
 等々源光一根を生じて繁茂せり。余世の事照子の妻止るといふ商人少旅し
 るのちのうきあやまきしや。後へは別大破加の宿する人のそなたは夏艱難の時時満重の本復して之別中
 下り所縁を頼り京都へ訪ぐるふ希有のこゝのみ依と官に任せられ本願を安堵
 する常例は終く序の横山が館を尋ね大膳をえぐるが先毒酒を以て害せ
 満重ふあれに驚き愧れ變りて既小逃去んとて屋を満重より徒手早く顔賊すて搦
 捕共す刑に然る而後沢山へ入るるふゆりのがれ上人の恩恩を謝し簡魔堂に於いて

報恩の爲自病す本復の像と刻を法舎を行ひ再活の徳を拜し。本國お
 づり小栗中住せり。是て照姫濃明小在り。是則呼下し謝縁を多かる満重
 その後一向三宝へ皈し星霜を待て應永三十二年三月十六日病死と法名
 重嚴院満阿弥陀佛と號し舎身助重願を遂げ鎌倉小倉に藤沢山へ入
 りて父并郎等拾人の碑を八徳池の辺りへ建追孝謝恩の供を以て簡魔堂に於
 て懇小堂のみあり。照姫の本より鐵土を飯の志流りしれは頓て薙髪受戒して
 長生比丘尼と号し。簡魔堂の傍に地蔵の像と小栗満重の像を安置し
 朝の光を摘み夕べの燈をかかげ専修念佛怠らば永享十二年十月十四日
 西向の瑞座合掌して逝と長生院妻佛房と号し。跡長生院と稱し。今
 藤沢山の一方と成りぬ。

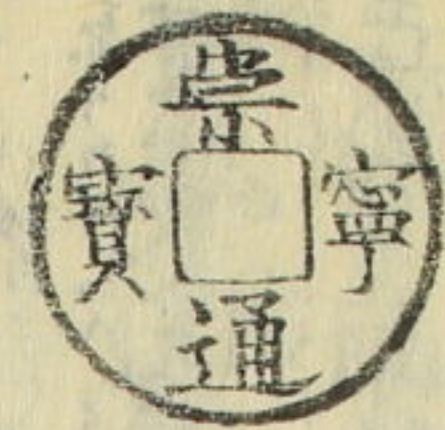
相州藤澤山内
 長生院



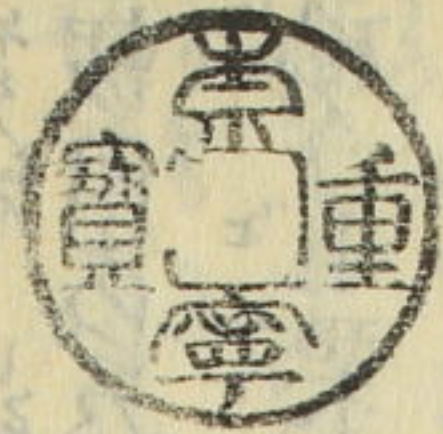
此錢ハ宋の徽宗帝の崇寧元年（一一三一年）鑄（たぎ）ま（し）り



文化土年まで七百十三年（一一三二年）多（おほ）なり大錢（おほぜに）一（ひと）と（と）も（も）く小錢（こぜに）

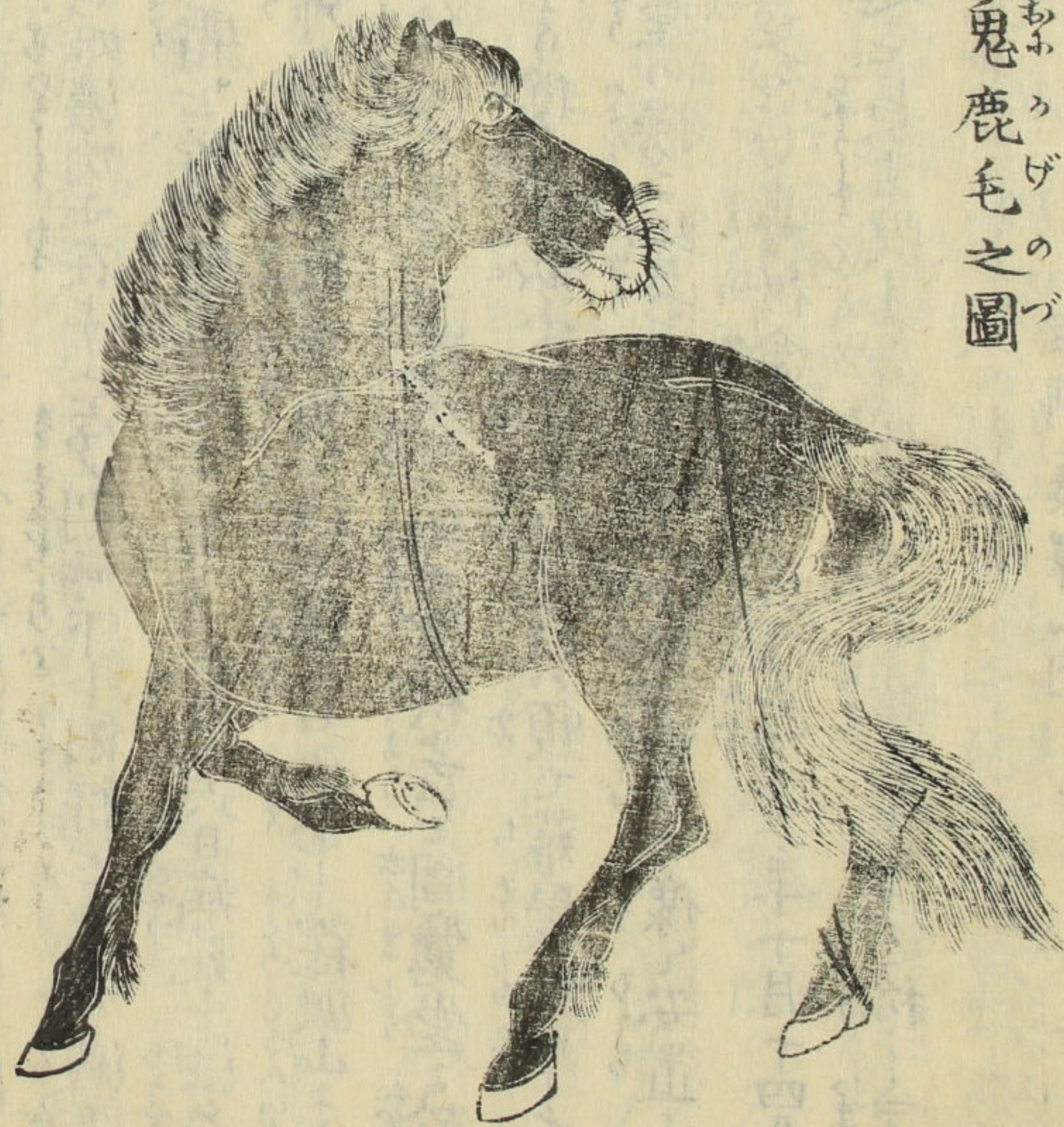


十小換（じゅうせうかへ）は昔照手（むかしあて）持（も）てて（て）て（て）て（て）て



長生院（ちやうせいゐん）ハ此錢（このぜに）あり

小栗横山（おのりよこやま）が邸（やし）わ（ら）と乗（のり）一（ひと）鬼鹿毛（おにしかげ）之圖（のゝゑ）

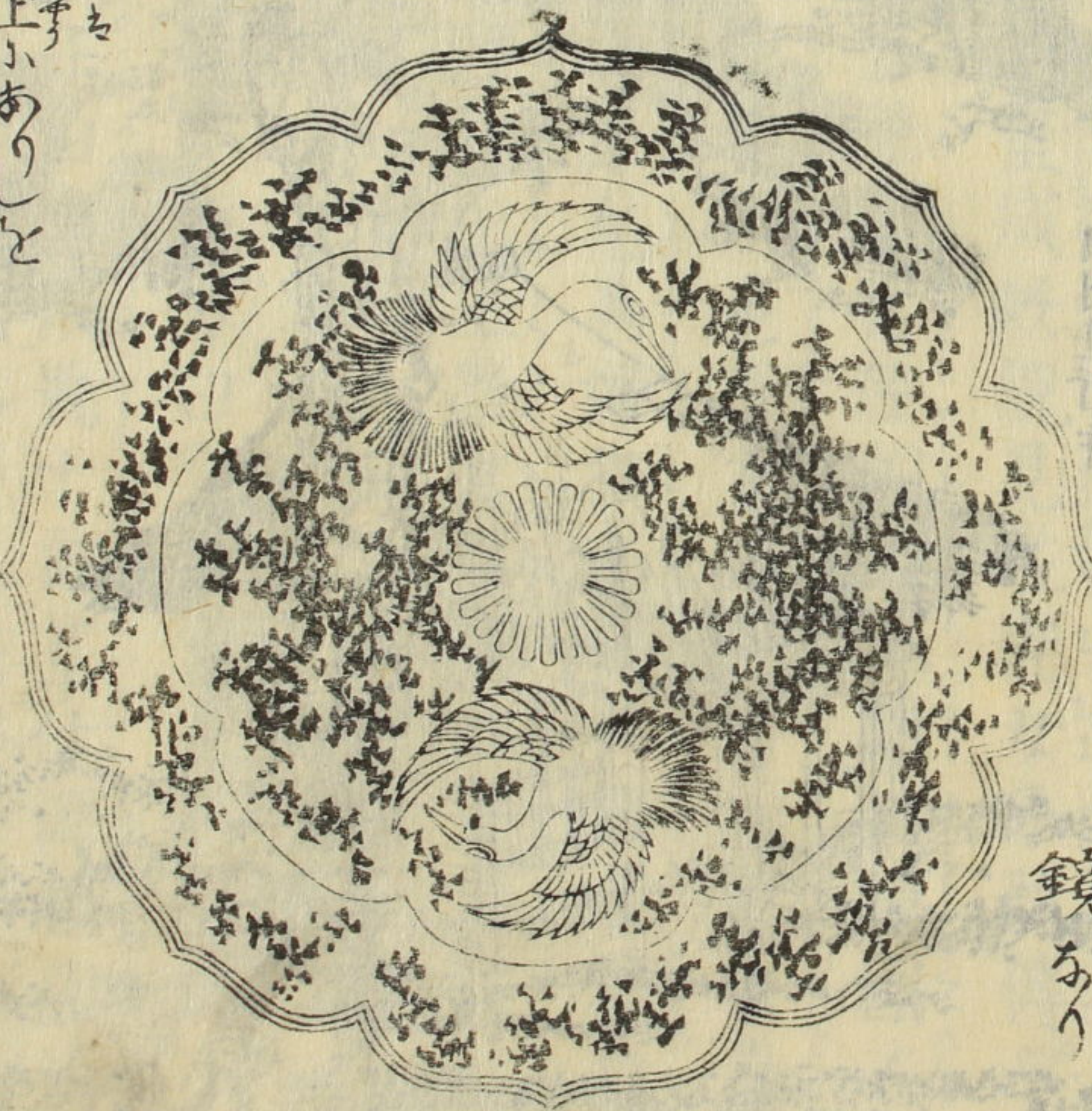


馬城雷洲
馬城雷洲

八陵（はつりやう）の鏡（かみ）又名唐鏡（たうかみ）

照天（てんてい）雉（けい）所持（しよじ）の鏡（かみ）あり

法國（はつこく）ヶ谷（がや）照姫（ていめい）の菴（あん）小栗墓（おのりむら）十騎塚（じゅうきづか）鬼麻毛（おにあしげ）轡（しん）八德水（はつとくみづ）横山屋鋪（よこやまやしやう）珍賀（ちんが）臺（たい）上野原（うののら）引地原（ひきちのら）車田町（くるまのまち）



上（かみ）書（かき）を十一名（じゅういちな）を長生院（ちやうせいゐん）の圖（ず）上（かみ）小ありしと紙中（しちゆう）挾（くわ）が故（ゆゑ）小（こ）さ出（で）一（ひと）好（この）

馬城雷洲



相州遊行寺

寺内

長生院

常陸國志云小栗氏地在真壁初國人相傳小栗判官兼
 家宅也按小栗氏是重成歎說見左兒女子所傳小栗
 說經書曰小栗判官兼家常陸國人也聞相模國人橫
 山氏有美如谷日照手國色有文遠寄書以挑女喜而
 許配兼家直趣橫山家乞為婚橫山惡其強暴鳩殺之
 兼家死入冥府見閻羅王王察其無罪放還兼家蘇生
 云荒唐可笑考日記小栗氏世系東鑑湘山星移集以
鎌倉筆中行事記等卷所出也常
 陸國大椽多氣繁幹第四男曰重義食邑真壁郡小栗
 地為小栗氏重義子曰重成號十郎並仕源賴朝治義
 四年源賴朝討佐竹飯路趣重成宅重成饗賴朝壽永

馬城雷洲

二十八

與重信戰因氏敗走重信縱火焚因氏家重信子曰朝
 重胤弥二郎朝重後食邑於小栗地應永年中足利滿
 隆遂持氏小栗氏為滿隆黨及持氏就位常例小栗氏
 族皆戰死遂絶後嗣云云

右中世の他小栗が傳を誌するの東鑑湘山星移集澁念年中行事
 記の書あり大同小異あり此亦記さるるに多し是と漏るるは他の
 書小栗が傳を載るものありや否世俗云傳小栗判官が右小栗出せ
 諸虫の説を混じ合して云々也

小栗外傳附録畢

○繪本藏收目次 皇都書林 三條街 吉野屋仁兵衛

繪本平泉實記 前後十一冊 靈狐繪本雙忠錄 十冊

兼久軍談 鎌倉太平記 前後十二冊 茶店墨江草紙 九冊

寒燈夜話 小栗外傳 自初編 十八冊 繪本頭勇録 十冊

繪本金花談 十二冊 自來也説話 前後 十一冊

同 彦山靈驗記 十冊 相馬總後偕語 自初編 十五冊

同 金羅神靈記 十冊 則定仁勇傳 八冊

同 箱根靈應傳 六冊 安信輪迴物語 仲唐 五冊

同 義勇傳 六冊 小野董八十嶋影 一代記 十冊

同 孝感傳 十冊 蛭虫少女玉草紙 七冊

長柄長者鶯塚 六冊 繪本一休譚 六冊

三三間堂棟抄奇傳 柳八系 五冊 同後扁く紫 六冊

河内未綿團七縞 五冊 三竹 檀風物語 五冊

小説峯の吹雪 五冊 信本發切傳 六冊

推八小紫 毎双い各語 五冊 中将姫一代記 平ら五 五冊

繪本浪系男 五冊 同 行状記 七 七冊

管語波の露 六冊 一休 七 三冊

繪本羽衣譚 六冊 新吟笑の友 五冊

報仇親子墳 六冊 法 五 五冊

孝子美終 唐 六 花街風流解 六 三冊

繪本雪鏡談 十冊 新編女水滸傳 六冊

同 二嶋垣男記 十冊 繪本孝女誓 三冊

同 龜山話 十冊 同 鮎の腹帯 三冊

同 沉香亭 十冊 新撰勸進嚙 五冊

小野小町一代記 六冊 廓中掃除 五冊

鏡山列女功 五冊 教訓 初篇 二篇 三篇 各十冊

復讐琴松譚 六冊 同 初篇 二篇 各二冊

同 武逸談 三冊 同 合巻 二冊

阿波の鳴門 六冊 釋迦八相物語 合巻 五冊

源午漆分州 五冊 同 一休記 二冊

